

# 卑弥呼の日蝕・再考

2024年11月12日 18:23

## 【はじめに】

齊藤国治『星の古記録』（岩波新書 1982年）は今手許になくその内容を追うことができないのですが、おそらくこの本の中で3世紀に日本で皆既日蝕が発生していたことが記されていたと思います。それが邪馬台国の卑弥呼あるいは天岩戸神話に関係する想像の元となったと思います。個人的にはその後、アスキー社の超高速天文シミュレーションというPC98シリーズで動くソフトで確かめたりしました。同じことを作家の伊沢元彦氏もされており、『逆説の日本史』でもその結果を科学的根拠として自説を披露されていました。21世紀に入りそれらを引用して横尾武夫「卑弥呼の日食」（[2001-11-02.pdf](#)）には「西暦247年、恐怖の皆既日食が邪馬台国を襲った。そして卑弥呼は死んだ」とのリード文が付けられています。さらには百田尚樹『新版・日本国紀』（上）にも「九州地方と大和地方でかなり大規模な日蝕が見られたのです」として伊沢氏の「卑弥呼は天変地異の責任を取らされて殺された可能性がある」という話を紹介し、「証拠はありませんが、こういうことを想像することも歴史のロマンであり、愉しさをないででしょうか」と書かれ、続いて天岩戸神話にも触れられています。では最新の計算結果ではどうなのでしょう。地球と月との距離の違いやそれによる潮汐力の精緻化によって、日蝕の見え方についてもシミュレーションより精度が高くなっています。国立天文台の[日月食等データベース](#)というページを参照しつつ考えてみたいと思います。

## 【卑弥呼の日食のあらまし】

横尾武夫「卑弥呼の日食」からそのあらましを見ていきましょう。

齊藤国治氏（旧東京天文台教授）の計算によると、卑弥呼が死んだとされる西暦247年（著者注：確定ではないが）3月24日に我が国で皆既日蝕が見られた。その時の皆既日蝕を北九州から見れば、愴絶（ママ）としか言い様がない。太陽が西に傾いた午後5時頃から欠け始め、太陽が完全に月に隠されたまま、真西の地平線に沈んでいったはずなのだ。これでは、人々は、もう夜が明けることは永久にないのではないか、という底知れぬ恐怖に襲われたに違いない。

小説家の伊沢元彦氏はそれを受けて、卑弥呼は「日の巫女」であり、太陽の祀りを司る宗教的な国王であった。その中で突然の皆既日蝕は、人々に、卑弥呼の霊力の衰えの徴に違いない、という思いをおこさせた。そして、卑弥呼は虐殺されてしまった。

そして、次の朝、何事もなかったように東から朝日が現れて、卑弥呼の復活神話が生まれたのだろう。それが、高天原の最高神としての「アマテラス大御神」（ママ）であったわけだ。

卑弥呼の墓の有力候補として、大和の巻向に箸墓があり、ヤマトトビモソヒメが葬られている。モソヒメの死はアマテラスの機織りの館での織姫の死とそっくり同じである。日本書紀の別伝（著者注：本文である）では、その織姫はアマテラス自身であったとある。アマテラスとモソヒメの伝承は共に卑弥呼につながることになるだろう。卑弥呼は247年3月24日の日蝕の夕べに自殺した、という第三の説はどうだろうか？

以上が、そのあらましです。

つまり太陽が完全に月に隠された皆既日蝕の状態でも地平線に沈んだことが前提となっています。欠けていく太陽が確認でき、太陽が地平線に沈む前に完全に暗闇の世界になっているはずであるということで、壮絶としか言いようがない物語が生み出されているとのこと。

## 【想像の愉しさ】

確かに「こういうことを想像することも歴史のロマンであり、愉しさ」です。なので、上のあらましに書いたような仮定に仮定を重ねたような想像に関しては、学者は口をつぐみます。

私は学者でも学徒でもないで、齊藤国治『星の古記録』に触れてからか、いくつか想像を愉oshimしました。そして思い出したのです。卑弥呼と日蝕を扱った話があったぞ。手塚治虫『火の鳥 黎明編』です。漫画少年に1954年から55年に、COM版が1967年に描かれています。手塚は3世紀に日蝕があったことを知っていたのでしょうか。思うに、この物語は卑弥呼を天照大神のモデルとしているので、天岩戸神話から日蝕に結び付けて描かれたのでしょうか。手塚は、日蝕により人々が「日が欠けていく」パニックになり「日の神のおいかりをしずめて」と卑弥呼に迫り、卑弥呼が「おそろしや」と岩屋に逃げ込む場面を描いています。それにしても手塚治虫の天才ぶりには本当に感心します。ついになら、『ジャングル大帝』の最初の方にウエゲナーの大陸移動説が描かれています。手塚が少年時代の昭和前期に日本に紹介されて、おそらく手塚はその時の少年向け雑誌に掲載されていた記事を記憶にとどめていたと思われるが、『ジャングル大帝』が描かれ出した1950年頃は大陸移動説は誰も肯定していなかったようです。

もしかしたら伊沢氏も少年時代に『火の鳥』を読まれたのかもしれないね。

閑話休題。

私も『火の鳥』の記憶があったからか、想像を愉oshinしていました。

私はいわゆる邪馬台国論争には距離を置いてきました。疲れるからです。とはいえ、邪馬台国は大和朝廷とはつながっていないと考えています。その一つの理由に、大和朝廷に卑弥呼に相当する人物が伝承されていないことが挙げられます。『日本書紀』編纂時、あるいはそれ以前の国記・天皇紀編纂時に『魏志』に触れて、かなり問題となったと想像します。

「『魏志』に邪馬台国（やまと読んだらう）の卑弥呼って女王が書かれているけど、そんなんいてへんで」

「気長足姫尊（神功皇后）のことにしとくか」

「年代が合わへんで」

「じゃーないなあ、干支二回り繰り上げるか」

「弟もいてないし、その次に台与（とよ）という女王がいるで」

「飯豊皇女にしたら余計に年代も合わへんしなあ。無視しよか」

ということで、神功紀ではいきなり年代が飛んで『魏志』の一部が引用されています。

年代引き延ばし工作の苦勞がしのべれます。

もう一つには、いわゆる「倭の五王」の上げられるでしょう。「上表文」などが伝わりますが、大和朝廷が邪馬台国から継続して卑弥呼の時代の話が伝承されていれば、当時の大陸の国家に自らの正当性を示すためにも約二百年前の魏との友好関係についても述べていたでしょう。特に「親魏倭王」とされた点など大きなアピールポイントです。

そしておそらくは邪馬台国に相当する国は大和朝廷となる勢力にどのような形か（国譲りなのか武力討伐などか）は分かりませんが、吸収されていったと想像していました。出雲の勢力が「国譲り」を行った結果、大和朝廷の神話の中に「出雲神話」が投影されたように、邪馬台国の時代の話も神話に投影されたのではないかと。

そうすると、日の女王卑弥呼の時代に皆既日蝕があり、そして翌朝また太陽が復活して東の空から昇って行ったことは、天岩戸神話に投影されていったのではないかと。

この想像もあくまでも、西暦247年の皆既日蝕では、完全に皆既状態が確認できたことが前提となっています。

## 【西暦247年に至るまで】

ここで今一度『魏志』の記載内容を確認しておきましょう。

景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻（238年）

238年に卑弥呼は難升米らを遣わしています。

制詔 親魏倭王卑彌呼（略）假金印紫綬 装封付帯方太守假綬（略）

卑弥呼を親魏倭王とし金印紫綬を授けています。

そして、難升米を率善中郎将に、牛利を率善校尉とし、銀印青綬を授けています。他に銅鏡百枚などを授ける内容が続きます。

正始元年 太守弓遵 遣建中校尉梯儁等 奉詔書印綬詣倭國 拜暇倭王（240年）

帯方郡太守弓遵は建中校尉、梯儁らを倭国に派遣します。

其四年 倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人（243年）

卑弥呼はまた使者を遣わします。

其六年 詔賜倭難升米黃幢 付郡假授（245年）

難升米に黄幢を賜います。

其八年 太守王頎到官 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素 不和 遣倭載斯烏越等 詣郡 說相攻撃狀

遣塞曹掾史張政等 因齋詔書黃幢 拜假難升米 為檄告諭之（247年）

倭女王卑弥呼と狗奴国男王、卑弥弓呼素とは和せず、倭載斯烏越等を帯方郡に遣わして、相攻撃する状況を説明します。

塞曹掾史の張政らを派遣し、詔書、黄幢をもたらして難升米に託して檄文を告諭します。

卑彌呼以死 大作冢 徑百餘步 徇葬者奴婢百餘人

卑弥呼が死亡し、大いに塚を作ります。その径は百歩ほどで、殉葬者の奴婢百人ほどです。

更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人

男性の王を立てるが、国中は不服で、さらに争いは続き千人余りが死亡。

その後卑彌呼宗女壹與（台与）を王にして国内が定まる記述などが続きます。

238年の遣使からその目的は、247年に続く狗奴国との争いを優位に進めることもあったと思われます。247年にはいよいよ狗奴国との争いが激しくなり、邪馬台国からの説明により帯方郡の塞曹掾史の張政らを邪馬台国に派遣して魏の権威をもって檄文を告諭します。これは和解勧告と理解すればいいのでしょうか。そしていきなり卑弥呼の死亡です。記述があっさりしている印象も受けます。

果たして、それは日蝕によって引き起こされたものでしょうか。それでは最新の計算結果を反映した国立天文台の日月食等データベースで確かめてみたいと思います。

## 【西暦247年の日蝕】

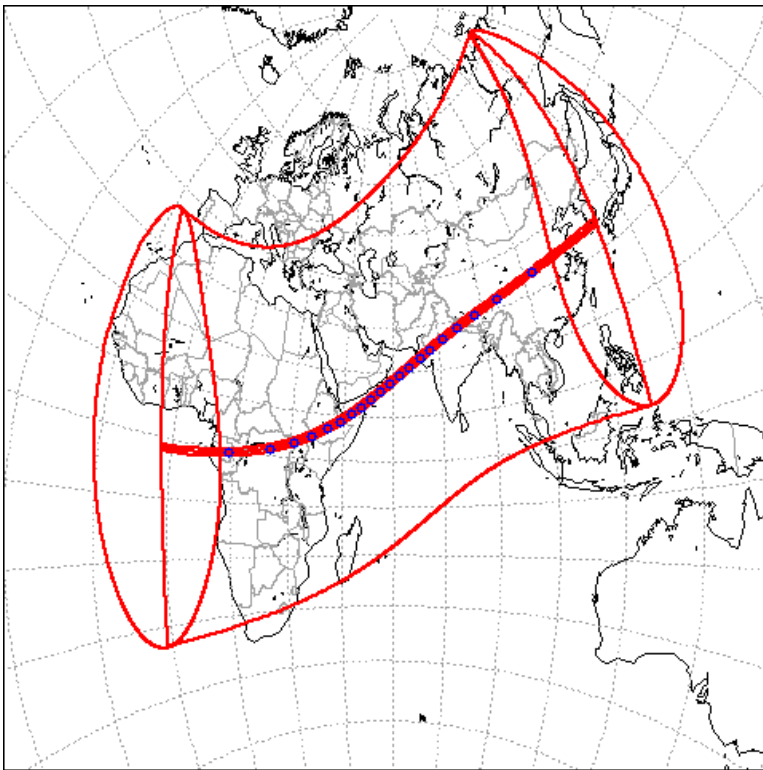
それでは日月食等データベースで最新の計算結果による西暦247年3月24日の日蝕を見てください。全体の日蝕の状況では皆既日食が観察可能なエリアに日本列島は入っていません（図1参照。なお「247/03/24（神功皇后摂政47年03月01日）皆既日食」と神功皇后摂政47年とあるのは日月食等データベースが『日本書紀』の紀年をそのまま和暦表示に使用しているため。以下同）。いきなり、前提が崩れてしまいました。朝鮮半島南部には差し掛かっていますが、当時の卑弥呼が朝鮮半島南部にいたわけではありません。

気を取り直して、邪馬台国比定地の代表的な候補（北九州と大和）ではどのように日蝕を見ることができたのかを確認しましょう。日月食等データベースでは代表的な都市での日蝕の見え方を表示してくれます。選択肢の中には都道府県庁所在地があります。北九州として、奴国（博多付近）の南に当たる地として佐賀市を選択しました。大和として、奈良市を選択しました。

佐賀市では17:38が食の始まりで皆既状態（太陽が全て月により隠される状態）になる前の18:32に日没を迎えます（表1-1及び図1-1参照）。この場合山地などを想定していませんので、西側に山がある場合にはそれ以前に太陽は沈んでしまいます。表2にある18:20の時点で山向こうに太陽が隠れた場合はまだ太陽は3割近くが見える状態です。太陽が上方にある場合ですと肉眼では日蝕の状態が確認できないでしょう。夕方の沈みゆく太陽ですと食が起きている状態がある程度は確認できたかもしれません。そして図2のように月が下の方から太陽の姿を隠していきます。どこまで日蝕が確認できたか、当時の人々が「日が欠けていく」と認識できたでしょうか。疑問が残ります。

奈良市は佐賀市よりも東に位置するため、日没時での日蝕の状態は半分ほどで、佐賀市の場合以上に日蝕と認識することが困難であったと思われる（表1-2及び図1-2参照）。

つまり、斉藤氏が計算された時点や横尾氏が「卑弥呼の日食」を記された頃から、日食計算に求められるパラメータ（ $\Delta T$ ）がより精緻になり、現在の計算結果では西暦247年の日蝕では「太陽が完全に月に隠されたまま、真西の地平線に沈んでいった」ところは日本列島のどの地点でも観ることができなかつたということになります。



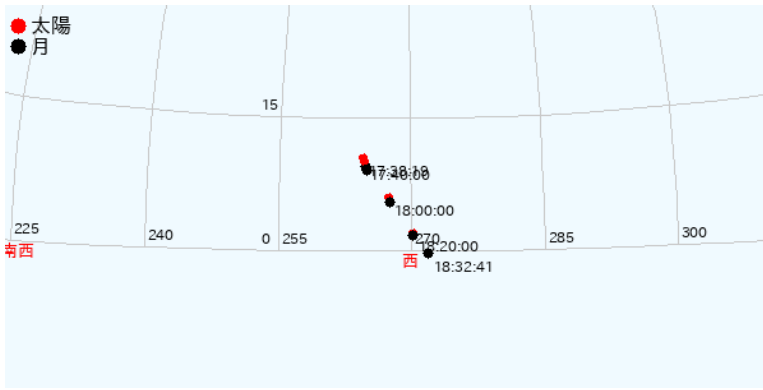
《図1：247/03/24（神功皇后摂政47年03月01日）皆既日食》

佐賀(佐賀県): Saga

緯度:33.2500° 経度:130.3000° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9<sup>h</sup>  $\Delta T = 7976.4^s$  (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]		かける割合		その他	
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
247/03/24	17:38:19	254	56	197	10.6	264.4	954	993	1947	0.000	0.000	食の始め
247/03/24	17:40:00	254	56	198	10.2	264.6	954	993	1893	0.028	0.006	
247/03/24	18:00:00	255	57	199	6.1	267.4	954	992	1237	0.372	0.259	
247/03/24	18:20:00	259	57	202	2.1	270.2	954	991	562	0.725	0.661	
247/03/24	18:32:41	282	57	225	-0.2	271.9	954	990	135	0.948	0.943	日の入り

《表1-1：247/03/24（神功皇后摂政47年03月01日）皆既日食》



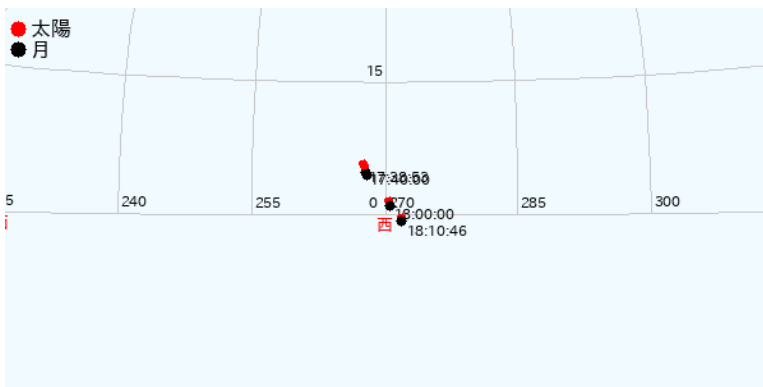
《図1-1：247/03/24 (神功皇后摂政47年03月01日) 皆既日食》

奈良(奈良県): Nara

緯度:34.6833° 経度:135.8333° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9<sup>h</sup> ΔT = 7976.4<sup>s</sup> (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径[']			かける割合		その他
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
247/03/24	17:38:53	252	55	196	5.8	267.4	954	991	1946	0.000	0.000	食の始め
247/03/24	17:40:00	252	55	196	5.6	267.6	954	991	1908	0.019	0.003	
247/03/24	18:00:00	251	55	196	1.7	270.4	954	990	1228	0.376	0.263	
247/03/24	18:10:46	251	55	195	-0.2	272.0	954	990	853	0.572	0.477	日の入り

《表1-2：247/03/24 (神功皇后摂政47年03月01日) 皆既日食》



《図1-2：247/03/24 (神功皇后摂政47年03月01日) 皆既日食》

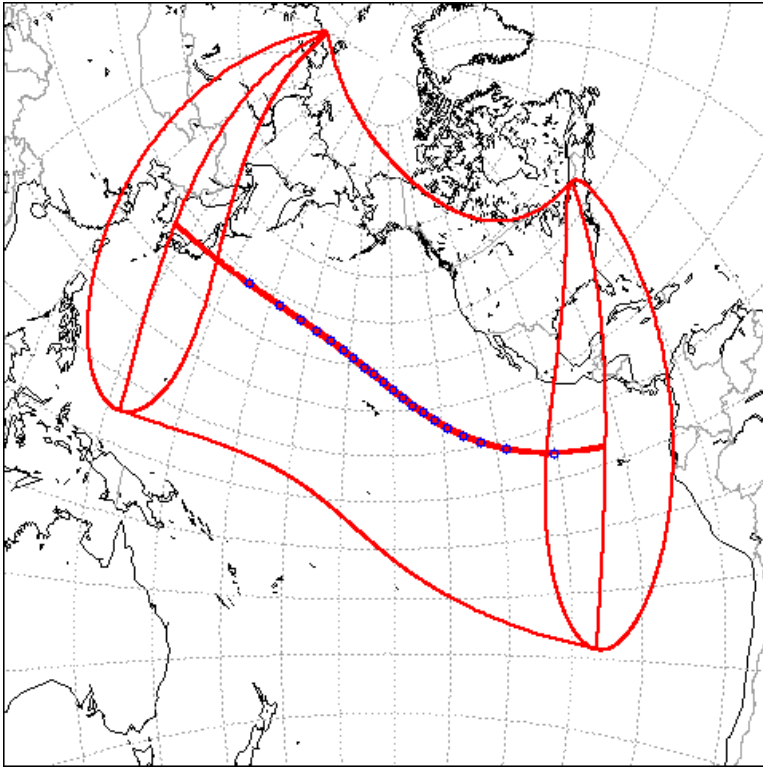
### 【西暦248年の日蝕】

実は翌年の248年9月5日にも日本で観測可能な皆既日蝕が発生しています。これは非常に珍しいことだと思います。皆既状態が見られたのは北陸から北関東にかけてのようです（図2参照）。前年の日蝕と同じように北九州と大和での日蝕の見え方を見てみましょう。

佐賀市では日の出の時に既に日蝕がかなり進んで食の最大を経過しており、山の端に日が昇る姿が見える頃には肉眼では太陽が欠けていることが分からなかったと思われます。そしてそのまま6:48に日蝕が終わります（表2-1及び図2-1参照）。

大和では日の出後に食の最大を迎える状態で、山の端に太陽の姿が見えた頃にはかなり食が進んでおり、9割以上の食分で太陽が欠けていることを肉眼でも確認できたかと思われます。皆既状態にはなりません、今の暦にすると9月の日蝕なので、木漏れ日には太陽の欠けた姿の陰を見ることができたかもしれません。食の最大から1時間ほどで日蝕は終了します。日蝕を目撃した人はどう感じたでしょうか。朝日が昇って来た時には、日が欠けていた。そして次第に元に戻って行った。そしていつも通りの朝の光の中で、人々は安堵したでしょうか。

もし卑弥呼が生きていて、そして大和の地にいたとしても、この日蝕が卑弥呼の死につながることはなかったと考える方が良いのではないのでしょうか。



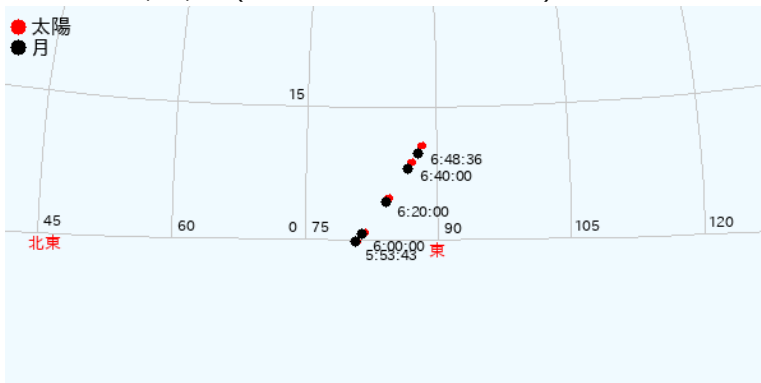
《図2：248/09/05 (神功皇后摂政48年08月01日) 皆既日食》

佐賀(佐賀県): Saga

緯度:33.2500° 経度:130.3000° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9<sup>h</sup> ΔT = 7966.9<sup>s</sup> (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]		かける割合		その他	
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
248/09/05	5:53:43	50	-56	107	-0.2	80.8	960	970	221	0.890	0.864	日の出
248/09/05	6:00:00	76	-57	133	0.9	81.7	960	971	388	0.804	0.754	
248/09/05	6:20:00	94	-57	151	4.8	84.4	960	972	1025	0.472	0.362	
248/09/05	6:40:00	98	-57	155	8.9	87.1	960	973	1663	0.140	0.062	
248/09/05	6:48:36	99	-57	156	10.6	88.3	960	973	1933	0.000	0.000	食の終り

《表2-1：248/09/05 (神功皇后摂政48年08月01日) 皆既日食》



《図2-1：248/09/05 (神功皇后摂政48年08月01日) 皆既日食》

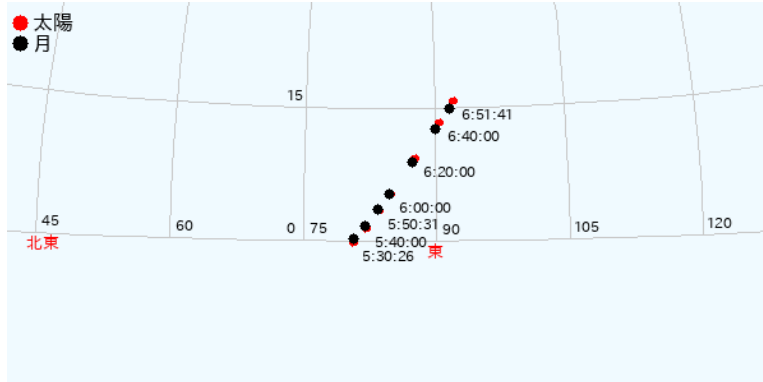
奈良(奈良県): Nara

緯度:34.6833° 経度:135.8333° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9<sup>h</sup> ΔT = 7966.9<sup>s</sup> (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]		かける割合		その他	
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
248/09/05	5:30:26	295	-55	350	-0.2	80.6	960	970	687	0.648	0.563	日の出
248/09/05	5:40:00	305	-55	0	1.4	82.0	960	971	375	0.810	0.763	

248/09/05	5:50:31	14	-55	70	3.4	83.5	960	971	135	0.936	0.922	食の最大
248/09/05	6:00:00	81	-56	136	5.3	84.8	960	972	340	0.830	0.787	
248/09/05	6:20:00	96	-56	152	9.4	87.6	960	973	963	0.505	0.398	
248/09/05	6:40:00	100	-56	156	13.4	90.5	960	974	1581	0.184	0.092	
248/09/05	6:51:41	101	-56	157	15.8	92.1	960	975	1934	0.000	0.000	食の終り

《表2-2：248/09/05 (神功皇后摂政48年08月01日) 皆既日食》



《図2-2：248/09/05 (神功皇后摂政48年08月01日) 皆既日食》

## 【おわりに】

西暦247年3月24日の皆既日蝕は日本列島では皆既日蝕の状態を実見することはできず、壮絶としか言いようがないような社会状態は発生しなかった可能性が高いと思われます。歴史のロマンとしては多少残念ではありますが、もしかしら、日食計算のためのパラメータがより精緻になり結果が変わる可能性もないとは言えないでしょう。

そして「卑弥呼の日食のあらまし」に引用しましたが「太陽が完全に月に隠されたまま、真西の地平線に沈んでいった」という結果であったとしても、「人々は、もう夜が明けることは永久にないのではないか、という底知れぬ恐怖に襲われたに違いない」という状況にはならなかったでしょう。太陽が完全に月に隠されるという中心食の状態は1分程です。1分ほど経てば太陽のもう片方から光が輝き出します。もし皆既状態で太陽が沈んでも、沈んだ太陽はその直後に輝き出し、その光は西の空を覆うことでしょう。

また別の視点から考えてみると、以下のことも言えるかもしれません。

『魏志』の次の記述です。

東南陸行五百里到伊都國 官日爾支 副日泄謨觚柄渠觚

有千餘戸 世有王 皆統屬女王國 郡使往來常所駐

伊都国に関する記述ですが、そこには帯方郡からの使者が往来し、常駐していました。そして上にも挙げた次の記述です。

遣塞曹掾史張政等 因齎詔書黃幢 拜假難升米 為檄告諭之

卑彌呼以死 大作冢 徑百餘步 徇葬者奴婢百餘人

張政なる人物が邪馬台国に派遣されています。卑弥呼の死やその塚について、そしてその後の状況などは張政の報告かあるいは伊都国に常駐していた帯方郡の使者からの報告を元に残された記録などが、『魏志』編纂時に参照されて記述されたかもしれません。もし日蝕により壮絶としか言いようがないような社会状態となり卑弥呼がそれによって死を迎えたのであれば、張政もその場に居合わせていたと思われるし、その状況を伝えていると考えられます。

さらには天岩戸神話にも関係しなかったことで、長年の愉しみが崩れてしまいました。あまりロマンのない結果となってしまいました。